

文久四年二月十四日より文久四年二月十五日まで

P8311090right

朝第五字時半前出立、□観音堂前野立別当正覚院出迎え、小休立より□申し聞く  
(小繫休)とも両□来り一同それぞれ支度混雑に付、断りをよぶ中山村小休、第十一時過小繫  
午休所長栄

寺へ着、当所代官添役入口に出役、右代官添役阿部武右衛門来り面す、第十二時出立前事代官添  
役出役

高山村を■内、道路泥濘を極め哈呀崎嶇(カンガキク\*) 実に村名其名と違えり、(小鳥谷(、  
こずや) 村野立)この辺より男子は髪月代

を□と又は寸程延ばし候、多く女子も老幼となく多半は眉を延ばしをり候、旅宿手前  
澗流瀧に石を噛み岩石塚に水を支え風景真に一幅の画の如し、第四時過一ノ戸

(一ノ戸泊) 旅宿へ着、当所代官、人馬差配役各所に出役す、当所はこの日よりまた追々に土地  
柄悪敷相見え

金家なき如く見受けしに旅亭の造営存外随座休、且美なり、前事代官随座生次え中島

六郎衛門来り、面す、産物土産(アユの粕漬)、土産の琥珀細工□也、此の細工巧なり化石類麻  
緒龍頭等織、類、即事、一

時星暖寒侵入窓戸木綿衾裏生和煦陰雲醸雪

P8311090 left

醸不成乍被東風吹做雨、餘寒稜峭枕張威

膏雨終交雪片飛所識前山全是雪樵夫白尽

緑蓑帰

十五日 戌 晴午前乍陰微雨霏(もや)に午下止晴雲

朝四十六度 昼五十度

第六時前出立、代官某出役、浪打峠(\*)野立続載(次ページ)より少数手前末の松山唱うる松

林あり頂に別浪打峠の断崖、海岸絶壁の如き場所、二三拾間程有し崖石輝き岩の如く貝壳杯若

干ありて土砂もまた海浜の砂の如く古昔海浜なること信をとるべし、

頂上に三葉の松一株

あり、此の辺溪間より化石を産する由、蟹(蟹)又は貝類の化石を此事旅亭に於いて一見したり  
き

夫の合考すれば海変じて岡岳となれるべし、此野立の場所は煎茶の場を設く是は此度の  
通行より村役を以て役□にて、既に此の野立の場にも同様の設ありしとぞ、其の労費察すべし

\*1:哈呀崎嶇(山が牙のように切立ち谷が深い様子)

\*2:岩手県二戸郡一戸町から同県二戸市にかけての峠

(内は細字双行(一行に小さい文字で二行書き)などの場合です。

煦印は解読未了の旧字体等です。私の実力ではすぐ解読できません。

【判読不可】■は、文章の一部に汚れ、虫食いにより文字が無い等です。